
刀と怪異と学園と。

有夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刀と怪異と学園と。

【Zコード】

Z3771V

【作者名】

有夢

【あらすじ】

病氣で死んでテンプレかと思っていたけどそんな訳でもないかと思つていると、意外とテンプレで転生しました。と言う物語。

まえがたり（前書き）

ノリで書いた反省も後悔もない

まえがたり

起きたら死んだらしい。

これは、僕がさつき聞いたばかりの話だ。死んだら、聞くことは出来ないだろうって？ できないんだろうな。それならなぜ聞くことが出来たかというと幽霊になつたからです。

普通、転生者になりました。と言う、テンプレな訳でもなく幽霊となつてふらついています。死因は、病死らしいですよ。新しい病気で対抗が無くてきゅうに死んだらしいですが、関係ないんですよね、靈体で生きているとなると、暇つぶしに町にでも行きますか。何もできないけど…

町に来ましたが、特に変わつてないですね。昨日も来ましたし。それと、幽霊だからと言つて足が無い訳でもないんですよ。意識の問題になりますが特に気にしないんですけどね。

そのまま、ふらついていると拳動不審な幼J・少女が居ましたが、周りからは気にされていません。黒子君みたいですね分かっていると。

そのまま放置とはいひかないでの一応、一応（幽霊なので）話しかけてみました。

「大丈夫ですか？」

幼J…もう幼女でいいや。幼女は話しかけられた事に驚きながらこちらをじっくり観察してきました。

見えているのでしょうか？ そのまま、観察？が終わつた後息を吸い込んで

「確保おおお！」

その一言に反応して、人ごみの中から何人かの人々が僕を捕獲して袋に入れてどこかに連れ去られました。

幽靈なら物質を通り抜けられるだらうと思い、それをイメージしてもできませんでした。どうやらこの袋…または、布、糸は靈体を通さない作りでできているようです。面倒な事になりましたね。靈体をこんな風に捕まえるとなるとどこかの実験室行きでしょうか？さよなら、幽靈ライフ。

長時間の移動だったので寝ていました。過去形です。文法はよくテストに出ますから気をつけましょう。

兎も角、寝ているときに袋から出すときは、普通地面に卸してからじゃないですか。それなのに頭から落とすとは痛いんですよ、靈体だけど。痛みによる、起床をして前…袋を後ろとした時ですけど…前の方を見るとさつきの幼女と知らないダンディそうな男性…元から人との関わりが少なかつたからほとんど知らない人なんですけど。学校の教師やクラスメイトの名前も殆ど覚えてないんですね。

「すいませんでした！」

マジで知らないダンディそうな男性、略してマダオ…オは何処から出て来たかと言うと男性の男から出て来たけど問題あつたかな？

「ああ、話聞いてましたか？」

マダオのオの部分に関する考えを考えていた時に何か言つていたらしい。聞いてなかつたし、誘拐未遂だし…今死んでいるから未遂。「いやまったく聞いてないけど」

それを聞いて幼女は

「今度はしつかり聞いてくださいね」

と、言つて少し息を吸つて、しゃべり始めた。長くなりそうだから、お茶を飲むことにした。取り出し方は企業秘密だ。学生だったけど。「まずあなたは死にました。これは分かつますよね。その死因となつた病気なんですけどこれは天界で作られた人間界にはない病気です。なぜ、それがあなたにかかつたかと言つと」

長くなりそうだから、聞き流すこととした。あと別に、書くのが面倒になつたわけではないよ、考えていたけど長くなりそだからパ

ス…結局面倒だった。

聞き流しながらお茶をすすつていると、マダオが隣に座つて話しかけてきた。その内容を簡潔にまとめると以下のようになる。

- ・外界つまり天界、人間界のように分かれている世界への干渉があつた場合等価交換が行われる。

これは天界だけではなく他の世界でも行われる。例、鋼の鍊金術師の鍊金術

・僕のように干渉が起き靈体でいると抑止力が出てくる可能性があるので転生を行う。

との事らしい。

「…以上の事からあなたには大体の記憶を持って転生してもらいます」

うまい具合に幼女の話も終わった。…しかし、一回田と一回田の話の長さが違うんじゃないのだろうか。

…記憶を持つて？幼女の話の最後に記憶を持つて転生と言つた。つまり結局のところテンプレでした。

閑話休題

「つまり僕は、よくある創作小説のチートを持つて頑張れと」

さつきの話を噛み砕いて茹でてその出て来た汁の旨味と苦味が丁度良い位で聞かせてもらつた。マジでダンディな男性、略してマダオから。幼女の話は関係のない部分も入つてくるので長くなる分分かり易くなる。

「まあ、簡単に言えばそうなるな」

僕は、マダオと幼女とお茶を飲みながらのんびりしていた。お茶やコーヒーに含まれるカフェインは少量で頭を活性化させることができる。まあ、死んでいるから脳…脳と言つ物質はないんだけどね。

「制限は？」

チートと言つてもできるじとも限られるからね。

「等価交換の中でさえあればいくらでも大丈夫ですよ。数で表すなら無限の剣製だと60位ですか。世界に干渉するものは基本的に高い数字ですね」

そういうつて幼女は冷たいお茶を飲んでいて、僕たちは温かいお茶を飲んでいる。それが見かけの差だ。僕は猫舌だけど靈体なら関係ないと思つてたけど味を知ろうとすると熱く感じたりする。不思議だ。つまり先の話は、自分に作用するものならその数字は小さいという事になるなら、僕が選ぶのは、

「それなら、刀語の鑑七実の見稽古と、ほとんどなんでも見える日に、それらを酷使しても大丈夫な体。それと僕に對して適応する能力」

少し欲張つてみた。これで余裕があれば知識も欲しい所だよね。

それを聞いてマダオと幼女は電卓を持つて計算していた。話を聞いてそれくらいなら大丈夫じゃつていう神共は計算能力が高いと思う。二人ともやつと計算が済んだようでこっちの戻ってきたみたいだけど、少しふらついているが、マダオは、

「要望は応えられますけどその場合だと肉体耐えられないから転生先が人間じゃなくなるかもしれないが良いか？」

それはびっくりですね。目で其処まではならないでしようから適応した能力が原因なのだろうそれでも要求は変えないけど。

「基本的に誰が見ても人で、活動範囲に限定が無い種族でお願いします。できればいろいろな知識も下さい」

僕の答えと要望に幼女が答えた

「適応した能力や自分の場所、環境についてのならできますが逆に言えばそれで十分足りるのだ。その世界にある技術なら見稽古で覚えればいいのだから。

「それで構いませんけど、僕はどういう世界に行くんですか？」

二人はその部分をはぐらかしたりしていいたので聞けなかつた。

あと、今の状態の知識や記憶とかは自我が目覚めてかららしい黒歴史が出来なくてよかつたと思うけどね。

そんな訳で覚醒するまでもお休みなれい。

おえがたり（後書き）

感想などがありましたらお願いします。

幻想郷で暮らしたかつた（前書き）

これ以降はノリとほかの小説を元に書かれています

幻想郷で暮らしたかつた

私的には、おはよ'うじやいります。

世界的時間で見ればお久しぶりになるのでしょうか?と言つても僕という人格を知つている人はあの幼女とマダオだけなんですね。

それと、僕に適応した能力は変わったのばかりでした。
アブノーマル異常と、怪異でした。他にもありますよ。あんまり笑えないけどね。

ね内容的に…

異常は『現実なる幻想』《リアル・ファンタジー》と言つのでした。何処の厨一だと聞きたくなりましたが、中身は幻想と現実の境界を操るような能力みたいです。スキマ妖怪?

怪異の方は、よく分からないですが東方のワーハクタクみたいでした。

怪異は暇な時調べていくつもりです。けど、なぜに東方?

ほかの能力は調べる方法が分からぬために保留です。

あ、目は常時発動してますよ。靈とか怪異や精霊なんかも見えますし夜でもしつかり前が見えます。

まあ、能力の話はここまでにしておいて、今の年齢は8歳です。かなり時間が飛んでいるつて?知りませんよそんな事

幼少期の記憶は少し飛んでますけど気にしませんよ。名前は七花なかなかです。七花しづかではありません。あと、昔の性は覚えてません。今は八雲七花です。

幻想郷在住です。…いや、あそこは境界の境目だけど、基本的に幻想郷に居るから幻想郷在住。

たまに外に出て怪異を調べたりしてる。この言い方だけだと一トみたいに聞こえるのは不思議だ。

そんな事ないからね！そんなに引きこもってないからね……引きこもってる。

その割に、白玉楼に結構行ったりしている。ただ、階段を使って行くとほぼ毎回妖夢が攻撃して来る。

弾幕ごとにで撃退している。面倒だ

まあ、今日は人里に来た。理由は、自分の怪異を知つておいた方が良いだろうと思い来たのだが、基本的に藍が来てるから、いまいち場所が分からぬ。

けど、怪異を知るには何処に行けばいいんだっけ？

そんな感じでうろうろしていると、後ろから声をかけられた。

「こんなところで何をしてるんだ？」

後ろを向くと青い服を着て白いまたは銀色の髪で五角形か六角形に近い帽子をかぶっていた女性が居た。

「なるほど。妖怪関係について調べようとしていたのか

「まあ、簡単に言つとそなりますね。慧音さん知りませんか？」

慧音さんは、白沢らしいので結構な知識を持つていると思うのでも聞いてみた。

「多分私と似たようなものだらうな。しかし、自分の中に居るもののが分からないのか」

「と言うと白沢ですか」

中国に伝わる人語を解し万物に精通するとされる聖獸である。白澤は黄帝に11520種の妖異鬼神について語り、黄帝はこれを部下に書き取らせた。これを『白澤図』という。ここでいう妖異鬼神とは人に災いをもたらす病魔や天災の象徴であり、白澤図にはそれらへの対処法も記述されており、単なる図録ではなく今でいうところの防災マニュアルのようなものである。（[wikipedia](https://en.wikipedia.org)）

自分の怪異が分かるとそれなりに楽になった。

（り）

「ありがとうございます」

「そんなに畏まらなくとも良いんだけどね」

その後、慧音（さん付けしなくていいと言われた）の仕事を手伝つた後、稗田家に行き見聞録を見させてもらい、幻想郷に居る上で記録に残っている怪異を調べお礼をした後帰宅した。

帰宅した後が大変だった。

「ねえ、七花。旅に出てみない？」

急に言われた。どちらかと云うと此処で墮落した生活を送りたい。

「何で？」

理由を聞こうとしたら、下にスキマが開いて落ちて行った。

「理由？世界を見てきなさい」

笑顔でそう言いながらいた。絶対戻ってきたときに弾幕ごっこをしてやる。

僕はそれを糧に生きてやろうと決意した。

そんなこんながあり、4・5年たつたある日なんだけど、振り返って思うと世界つて平行世界も含まれているのだろうかと思いながらスキマを開けて移動していた。スキマが使える理由は見稽古です。本当に便利だね。

「とーちゃーく」

僕：今は私かな？まあ、どっちでもいいけどね。ついた場所は一番最初に落とされた世界だつた。時代が違うけどね。大体350年位前かな。その頃に吸血鬼にあつたね。フルボッコにしたよ。その吸血鬼がよく分からぬ攻撃をしてきたから、見取つて同じ技を倍以上の威力で返して（生きられる程度に）スキマを使い時間を今くら以にして旅をしていると怪異にあつた。内容は化物語で知つてね。兎も角、そんな感じでいろいろ見てきた。特に西尾さん関係の物語…そのおかげでまにわになどの技術も手に入れた。ただ一つ失敗

したなと思う事は七実さんが持つてゐる悪刀を見ようとして七実さんも一緒に見てしまつたという事だね。才能も見取つて病氣も見取つたが異常によつて病氣はかなり軽減されてゐるけどつらいね。他には、死神が刀を振り回して戦う世界やオーラと言う氣に近いものを使うハンターの世界に歪んだ望みを叶えるものを求め七組が戦争をする世界とかいろいろ行つてきた。ちなみに此処に来る前に幻想郷に行けたので、スキマ妖怪とその時の本氣で弾幕ごつこをしてぎりぎり負けた。弾幕結界はそう簡単に避け切れないね。残り10秒未満だつたけど。

回想は置いといて何処なのかを知つておかないと。

「なんや、子供かいな。悪いけど死んでもらうで」

とりあえず、ストレス発散と行きますか。

「死ぬのはお前らの方だ」

そう言いながら、僕は服の中 褶から靈夢が使つてゐる退魔針を持ち近づいてきた鬼のゾボまたは急所に刺して幻想郷に入れた。方法は、針に異常を附加してゐるので、鬼は、現実に居れなくなり幻想になる。その幻想になる時に幻想郷の結界に引っ掛かり幻想郷に行く。つまり、一石二鳥なのかな？針を使いながら鬼を潰し終えた時に、誰か來た。

「貴様何者だ！」

そう言いながらサイドポニーをした同年代位の少女が襲つてきた。相手が野太刀を振り下ろしてきたので針をぎりぎり当たらない所に投げると、相手はそれをはじいて、後ろに下がつた。グレイズを制する者は今のを避けずひるまず弾かずに突撃してくる。つまり、遠距離に関して素人。

そう結論を下して、袖から炎刀『銃』を取り出しづ所以外を狙つて撃つた。少女はそれを弾きながら接近してきた。当たるか当たらなかが分からなくなるに当たると確定してるのは弾けるつていうことだ。

「神鳴流に距離は関係ない！」

……いや、知らないけど。ちなみにこの炎刀は異常を利用して、弾を作っている。それ以前にこの少女かなり面倒な性格しているな。みょんより真面目そうで面倒だね。

さつさと終わらせるためにスペルを使わせてもらつ

「断罪『炎刀』」

内容は右衛門左衛門が使っていた断罪炎刀と同じで炎刀の発射口から炎を撃ちだすだけの技。ただスペルカードになっているので數と大きさが違い、左右と後方はほぼ無防備なスペル。あと、別に燃えないよ。

急に出て来た炎に戸惑いながら少女はそれを斬つたり避けたりしていた。避けるだけの方が楽なのに。

疲れたので、スペルを中止すると少女はなぜか勝ったような顔をしていて相生忍法「背弄拳」を使い後ろに回った後バックドロップを繰り出し気絶させただ虚しいだけの勝利を手に入れた。

夢見物語…と書いつよつ予知夢？（前書き）

特に書くことはないけど、何か書いていた方が面白そつだから、何らかの台詞を書く…本編には関係しない。

「幻想と現実は、向きが違うだけの直線だよ」 b/sy七花

夢見物語…と並のよつ子知夢？

あの虚しい勝利の後僕は即座に逃げようかと思つたが遠くから狙われているような気がしたのでなんとなく負け犬である敗者を盾にしようかと考えながらいると捕まつた。

ちくせう。

「それで何でこんな立派な部屋にこんなむらつひょんが居るんですか」

「ぬらりひょんと言われたことはあるがぬらりひょんは初めて言われたんじゃが」

「失礼。 噛みました」

「違うわざとじや」

「噛みまみた」

「「「わざとじやない！」」」

失礼だね。 本当にミスったんだよ。 直そうかと思つたけどいいち方が面白そうな気がしたからそのまま。

この部屋 学園長室に居るんだけど、なぜ女子中？の校舎内にあるんだろう。 やはり、変態むらりひょんだね（笑）
「さすがにひどくないかのお」

僕はこのセリフを聞いて変態むらりひょんから、変態むらりさとりにランクアップした。つまり、変態性が上がつた。ちなみにこの部屋に居るのは、変態とマダオ（まあ、それなりにダンディーなおりさん）の略）、幼女である。

「ひどくありません。人の心もしくは考え方を読むのを意識的にするのは変態のする事であつて妖怪のさとりはそのような概念を持つているから人の心を読むことが出来ますが、あなたののような変態むらりひょんがやつていいことではありません。結局、言いたいことは変態くたばれということです」

言いたいことを言い切ったのですが、なぜ全員引き攣った顔をしているんでしょうか。そのまま引き攣った顔で死んでくれないかなー。現場検証に来た刑事さんの顔が引きつった顔を見てみたいからさ。

だからさあ、Let Try!

「「「するか……」」

なんという息の合った突込みなかなか見れないものが見れたね。どうでもいいけど何でここに来たんだつけ？息の合った突込みと変態を見るためだつたね

さて、どうでもいいが書いているときと見てているときの半角と全角についての違いを考えてみると、見やすさ以外思いつかないのでがどうなんだろうね。

「えっと、それでなんでしたつけ？オーブの最終回がかなりい感じでまとまっている件についてでしたつけ？それとも映画化についての話でしたつけ」

「お前は何を言っているんだ！！そもそも何の映画化だ！！！」

?映画化しているのは確かなんだけど

「それよりも貴様は何者なんじや」

「その台詞そのまま返すよ」

ぬらりひょん…もとい、むらりひょん、いや、変態でいいやもう。自分の行動と後頭部を見てからいえばいいのに…ほら、ほかの二人も肯いてるしさ。

「こんな時間に淡々と変態と話す趣味はないので帰つていいいですか？」あと、質問の答えは人間であつて人間でないですわ

よくある体は人外心は人だつてやつだよ。嘘だけど。体は体。心は心。結局のところ別物だよね。

「う～む」

「ああ、それ爺…もとい、変態がしてると気持ち悪すぎて殺したくなるからやめてください。そこに居る一人（？）ならまだしも」

そう言いながら、突っ込みはするのに話の方には入つてこない一

人（一人は人外な気がする）を指しながら言つての変態は泣きかけていた。眞面目に気持ち悪い。

「お主は、これからどうするつもりじゃ？」

「そうですね。暇潰しとしてこの学園を買い取つて経営でもしましようか」

マダオ…いや、おっさんでいいや。おっさんと爺は驚き、幼女は笑いを堪えている。

「まあ、嘘ですけど。本当は特にやることはあります。もしこの中にまともな人間がいたら僕の前に来なさい。つてくらいですね」後半のネタで突つ込まなかつたのは、自分が普通だと思えないのか。悲しいね（笑）

爺が咳払いしてから

「ならこの学園で働かないかの？」

「え、やだ」

即答した。動かない、動かない、何も見ない。あれ？ サル？ 見ない、聞かない、言わない。の猿。

「む…なら、見た所中学生くらいじゃから学校に行かないかの」

「まあ、そのくらいならまあ良いですよ」

他の世界で高校とか行つていたから中学に行かなくともいいんだけど暇潰しくらいにはなるだろうし。

肉体年齢と精神年齢がかなりずれてきた。それと、実年齢つてどつちの年齢の事何だろうね？

「ほつほつほ。交渉成立じゃの」

あ…交渉だつたんだ。相手と同じ立場か自分が上じやないと意味がないと思うけど。

「何時までもお主じや悪いからのお。名前を教えてくれんかのあえて、此處で偽名を使うのが、僕なんだよね。つまり、信用も信頼もないってこと。

「八雲 七花」

七花じゃなくつて七花つて言った。本当に地味な偽名。結構な頻度

（なか）

で使つてゐるけどね。

「四月から通つて貰う事になるが良いかの」

「良いんじゃない」

自分が関係しようが客観的もしくは他人事で済ませる。それが七花
クオリティー。

「それじゃ、眠いから帰ります。お疲れ様でした。と、行きたい
んですけど学校に通うから何処に帰ればいいんですか」

「おお、そうじゃったな。タカミチ君量まで連れつてくれんかの。
確か、空いていた部屋があつたじゃろ」

「あ…はい」

その後、僕は夜中にその学校の寮の一室に入つて掃除を済ませて眠
りについた。

「……つてことが起きやうなんだけどどうかな?」

僕は、隣りに居る女性もとい少女に問いかけた。

「確かに、君なら普通にできそうだな。学園長に君を連れてくるよ
うに言われているからついて来てもらひぞ」

「まあ、それはいいけど。これはどうするの?」

バツクドロップを食らつて氣絶しているのを指さしながら言つと
私が持つて行くつて言つて持ち上げた。かつこいこい（棒読み）
その後、実際に学園長室に向かつて歩き出した。ちなみに、前述に
述べたことが実際にありました。

まあ、出逢いは本当に突然に

寮生活一日目

寮に来て三・四時間寝て起きた所である。

つまり、かなり眠いので寝たいのだが、一度寝ると明日まで起きられそうないので寝ないことにする。うう、寝たい。

まあ、本音は置いておいて、現在朝の八時朝食を作ろうとしても材料がない。スキマ（仮）に入つてたつけな？……うん。ないね。中身が結構力オスでした。

それでも、換金できそうなものが結構あつた。金とか銀とかクリスタルとかルビー やサファイヤにエメラルド、あと、ダイヤモンドにパール、プラチナもあつた。これだけあれば結構なお金になるよね。

とりあえずこれらを換金しに行こう。

迷子になりました。いや、広いね此処。広すぎるていうぐらい広いね。ここは量からみてどの辺？言いたくなる位に分からなくなるね。怪異か東方能力で良いのあつたかな？ちなみに、私は東方の能力は持つていません。だから、見取つて使えるようにしました。：あ、萃香の能力を使えば何とかなるかな。

自分の体の一部を霧のようにして人の形をとれる限界で止めた。あとはある程度経つたら、元に戻せばなんとかなる筈。しかし、此処は学生の方が多いんだろう？まさか、此処はとある科学の学園都市なのか？もしそうだとしたら、あの後頭部の長いのがアレイスターになるのか。……うん。ないな。

今思うとこの身長で換金してもらえるか？普段は170？後半で今は150？前後。萃香の能力で疎にした分が25？位という事に

なり身長がそれだけ縮むということになる。と言つのは嘘で、25位を疎にしても、170?を保てていたけど、歩き難いのでバラансが取れるまで集めたらこの身長になつた。しかし、萃香のミッシングパープルパワーで、そのまま大きくなるのはどうなんだろうか。さつきやつたのを逆の順序でやれば身長を伸ばせるのだろうけれど。

さつきから考え方ばかりしていて一歩も動いていないけどじうじょうか。とりあえず、適当に歩けばどこかに着くだろうしね。ああ、できれば今は幻想郷に着きたくないね。巫女に殺される。戻つて来て弾幕「」にして負けて放り出されたから挨拶とかしてないし博麗神社にお賽銭をしてないから、怒つているという事を藍から聞いたので行きたくない。

そんなことを考えながら歩いていると、着物を着た今の自分と同じくらいの身長の少女がこっちに向かつて来ていた。着物つて走りにくいのに頑張るねえ。

僕の隣を通りうとしていたらこけた。なぜに?……ああ、アスフルトの一部が出っ張つていた。整備しておけよ。見て見ぬ振りが出来ないので声をかけておく。

「大丈夫ですか?」

そう声をかけながら相手の姿を見ていた。うん。特に怪我もないようだね。

「えつと。大丈夫やけど」

それを聞いて僕は手を彼女の前に持つて行った。彼女はそれに気が付いて手を掴んだので腕を引っ張り起こした。

起こし終えた時に後ろの方から

「居たか?」

「いや…いたぞ!」

後ろの方を見るとなんとなく漫画とかで見そうな黒服サンガラス…逃亡中のハンターだ。

その黒服たちがこっちに走ってくるとなぜか僕も走り出すことに

なった。どうやら彼女はあの黒服から逃げているらしい。

「どうして…逃げてるの？」

僕は走る体制を整えながら聞くとお見合いが嫌だかららしい。中学生にお見合いつて…お見合いを企てた人に対して呆れられるね。

「それで逃げ切りたいの？」

「そう…やで」

着物で走っているから疲れているみたいである。

「なら、その願い叶えてあげるよ」

そう言いながら、彼女をお姫様抱っこして、とある能力を発動させる。

「六星神器 電光石火！」

知っている人は知っているローラースケートである。かなりの速度が出せるし、一回見たので、人混みもあつという間に抜ける事が出来る。しかし、これはどこに向かっているのであろうか。何処に行けばいいのか聞こうとしてもこの速度に驚いているのか声をかけてもパニックに陥っているらしくどうしようもなかつた。

誰か…誰か…助けて下さい。（泣）

そんな事があり、数分後に彼女 木乃香さんが復活したので、何処に向かえばいいか聞き…道案内してもらひながら自分の部屋のある寮に着いた。あれ…？

道案内してもらつたことで此処の土地に詳しくないことが分かつたらしく道案内してくれる事になつた。断ろうとしたけど、断りきれなかつた。あの気迫が怖かつた。どうして僕の知っている女性はどうでも良い所で気迫籠つてゐんだけうか？

待つてゐる間に疎にしていた一部を体に戻しておく。ちなみに身長は変えないのでおく。

そんな事で四・五分潰していると私服に着替えたであろう木乃香さんが来た。まあ、作者の技量が少なすぎる上に服に詳しくないので簡単にまとめると、春物の女の子らしい服。である。

「「めん。まつた？」

「いや。全然。それでどこに行くのさ?」

「う~んと。商店街付近やな」

その途中でひつたくりや、強盗に出逢つたりしたけど全部蹴り倒した。ローキックから回し蹴りを食らわせて警察に突き出した。あれ?僕つて不幸体質だっけ?そう思つと、今まで事件だ何だのに巻き込まれたのが納得できる。……納得したら駄目だ!

商店街の説明をしている途中で宝石屋とかがあつたので換金した。大儲けした。

その後、昼食になつたので近くにあつたミス〇でドーナツを食べているときに

「なあ、昔に会つて『うやつて喋つたことなかつたん?』と聞かれたので、覚えている範囲でなかつたので正直に答えた。

「……いや、なかつたはず」

その後、また案内をしてもらつて別れた後、雑貨店でいろいろ買つたりしてスキマ(仮)に入れて食材を買って帰つた。

まあ、帰る途中に殺人鬼にあつて空間の境界を弄つて殺し合いをして満足したらしく帰つた。こんな所にも殺人鬼が居るんだなあと思いながら部屋へ繋がるスキマ(仮)に入つてから空間を戻しておいた。

その前に、部屋を本格的な掃除をしないとダメだったので大変だったが…

まあ、学校へ行けり。こやです。（前書き）

テスト期間？勉強？なにそれおいしいの？そんなこんなで始まる話
じゃありません

「世の中学力」がすべてじゃなにって事、証明できたら良いです
よね～

さあ、学校へ行こう。いやです。

寮生活九日目

時間が跳んだ? 気にしない、気にしない。

僕は、朝起きるときは基本的に目覚まし時計を使っている。それでも最低七時には起きるようにしている。

だが、目覚ましは今までその機能が動かすに八時五九分を差していた。

徐々に大きくなる秒針の動く音。それが絶頂に達した時本来の仕事を始めた。

バヒューン。ガチャ。ジジジジジジジジジイジジジジイイジジジ
ジイジジジ」

「うるさい！ 黙れ！」

どういう訳かゲッタンしていた目覚まし時計を完全に殴り壊し、その壊れた時計を端に捕らえながら寝間着から私服に着替え少し遅い朝食の用意をし始めた。

とりあえずいつも通り和食で良いかなと思い、昨日炊いたご飯と昨日の残りのイカ大根と味噌汁の用意を始めた。と言つても温めるだけで済むから楽だけど。

七花が朝食を作り終え、食べようとしていた時…丁度これでもかと言つくらいご飯に箸をつけようとしていた寸前この部屋にある電話が鳴り始めた。

「ホール音を聞きながら食べる気が無かつたので一応出ることにして受話器を取つての第一声が

「魚の骨を喉に詰まらせてくれさー」

『唐突じや』ガシャン

さ、朝食を食べよ。

ふむ、大根に味がしつかり浸み込んでいるな。イカも柔らかいな

）。

特にこれと言つたこともなく朝食を食べ終え片付けも済んでこれからどうするか考えているとまた電話が鳴りだした。どうせ電話を掛けてくる人物は分かっているが一応出でおく。

「鳥の骨を喉に詰まらせればいいと思ひます」

『さつきよりも物騒になつてないかの』

「氣のせいです。何言つてるんですか？ただの自製の挨拶ですよ」

『そ、そうかの。それで、いつになつたら学校に来るのじゃ？』

「……………はい？」

『いやじゃから。今日から新学期が始まったのに来ていいな』といふ事を聞いたから。こうやって電話してみたのじゃ

新学期？つまり今日は四月の月曜？そう思い、部屋にある時計に出ている日付けを見ると四月一日月曜日。

否定の使用が無く新学期が始まる。

『聞いてるかの？』

「ええ。聞いてますよ。ただ、何も聞いてなかつたんで今日は私服登校してもいいですよね。答えは聞きましたけど。それと人間の骨を喉に詰まらせて死んでくださいね」

そう言い放ち電話を切つた。

学校に行くと言つてもこれと言つて用意するものが無い。あえて言つなら文房具くらいだろう。それと、自己防衛用のナイフを一本隠し持つておこう。

用意も済んだのでわざと学園長室に向かう。鍵？盗られる物が無いからかける必要がない。

電車に乗つて行くより建物の上を駆けて行つた方が速いが体力的に持ちそうに無いためスキマである程度近い所に繋げて移動した。見稽古つて便利だよね。技術や特殊能力的なものなら普通に扱えるんだから。

まあ、それが原因で病弱で貧弱の最強と同じになつたんだけど。

そんなことを考えながら学園長室の前まで来た。

此処からドアを蹴り壊して入るのも良いが、一応ノック位しておいた方が良いと思いノックした。

「ノックしてもしもお～～～し

返事がない無人のようだ。よろしい、ならば蹴り壊す。

扉から少し離れて1mくらい離れてから、一気に加速して扉に蹴りを入れようとした。

そう、入れようとしたのだ。扉には当たらなかつた。ならばどうなるかと言つと、

「今開けるからのおおおーーー?」

内側から開けられその開け方によつてはその人物かそのまま部屋に突つ込むことになるのだが、今回は前者の方だつた。

「……あ

「ふおふおふお……さて今日來てもらつたのは今日から通つ学校についてじや」

おかしいな？扉を壊すことが出来る蹴りを頭に食らつておいて首折れないの？まさか吸血鬼のような不死身性を……ないよね、ぬらりひょんだしね。ぬらりひょんがどうであれ始業式が終わつていふのに生徒は残つているのかと思いながらいると、後ろの方からノック音が聞こえその後に入室許可を聞いて入つて来たのは僕を寮にまで連れてつた、た……た

「煙草畠？」

「高畠だよ」

何か間違えていたみたいだつた。気にしないけどさ、人の名前つてなんとなく覚える気くない？覚えてもそこまで関係が何時までも繋がつてゐる訳でもないから覚えきるつもりもないし、その関係から行くと漫画とかのキャラの名前を覚えるのは後もその漫画を読むからその不都合さを無くすためなんだろうか？まあ、いいや戯言だし。

「それで？今から教室に行くですか？」

「つむ。高畠君についていけば大丈夫じゃ」

お前には聞いていない。ここから（男子の）教室まで遠くないかと聞くとすぐに着くとの事…どんな方法使っているのか聞いてみたしさー？」

「それじゃあ、行こうか」

僕はその言葉に肯いてついて行く事にした。

「そして辿り着いたのが（変態にとつての）理想郷と書つた教室？」何を言つているんだい」

「いえいえ。何もないですよ」

たどり着いたのは男である自分とは全く関係のない女子校舎の2-Aの教室の前。しかし、教師がいないだけ此処まで五月蠅く出来るものなのか。馬鹿でしょ、このクラス。漫画とかである問題児を集めたクラスだつて言つても違和感がない。しかも、なぜか黒板消しが挟められている。暇すぎるし、自由すぎるでしょこのクラス。黒板消しが挟められている間から中の様子を見てみると、

……幽霊が居る。普通に居るし、ペン回しをしている。しかも幽霊用の靈体で出来ている奴だ。

そこから別のところを見ると、何時かの、辻斬りが居た。そこにある市内袋の中は一体何が入っているんだろうね。刀だと思つけど

やばい、もう帰りたい。帰つていいかな。

その趣図をアイコンタクトで伝えてみると、却下された。通じたんだ。

「それじゃあ、先に入るね」

そう言つて扉を…幼稚な悪戯を無効化しながら入つて行つた。今のおうちに帰つてもいいかな。

教室の中は教師である高畠が入つて来てから一気に静まり返つた。いや、水面下で暴れているのかも知れない。なぜ彼女たちがあそこ

まで騒いでいたのかと言うと転入生が来るという事だ。

一人の少女はそんなことはなかつたと思い、一人はその人物を取材したく、一人はまともであればいいと思った。つまり、ほぼ全員が興味を持っていたという事だ。

何故”ほぼ”かと言つと、言葉のあやである。

高畠が廊下の方へと入つてくるように声をかけるが返答も行動もなかつた。

高畠は本当に帰つたのではないかと思い、戸に手をかけ確認しようとしたとき向こうの方から戸が開けられた。そこに居たのは、白いアヒルの様な、ペンギンの様な生き物とも言い切れないモノだった。ソレが戸を開けた手の逆の方にはプラカードが握られており、『廊下でずっとスタンバつてました』

それを見た者全員が一斉に

「――――――知るかあああああ――!」「――――――

れあ、学校へ行け。いやです。（後書き）

テストなんて、テストなんて滅んでしまええええーーそんなこと
を思う昨日の今頃

感想などがありましたらよろしくお願いします

帰つていいかな。……え？駄目なの（前書き）

赤点なし。高得点なし。そんなテストが帰つて来たから書いたくせに長くなつた。

何故だらう？

そんな感じで始まりません。
ではどうぞ。

帰つていいかな。……え？駄目なの

前回のあらすじ（簡略化）

始業式により学校へ行かなくてはならなくなり、
行つたら行つたで女子中に編入、
エリザベスがスタンバつてました。

まあ、そんなことは僕には一切合切関係がありませんと言つても
いゝような感じがするが、エリザベスにスタンバつてもらつたのは
僕が頼んだからなんだけど別にいいよね。

待つている間暇だつたうえに小腹も空いてたので何か買いに行こ
うと思つた時に、丁度見つけたのでスタンバつてもらつたのだ。そ
のついでにクロッケパンを買つて来いつて言われたけど売り切れて
た。

なので買つてきたのは、焼きそばパン、カレーパン、カツサンド、
チョココロネ、クロワッサンである。

食べ歩きをしているが、始業式で早く終わつてゐるため、ほかの
教室には目測で大体数えられるくらいの人しかいなかつた。クロワ
ッサンを頬張りながら教室まで行くとかなり騒いでいた。

「元気だねえ」。何か良い事でもあつた？ああ、それとエリザベス
先輩焼きそばパン買つて来ました」

ぼくが声をかけて帰つてきたのは字の書かれたプラカードだつた。

『俺が頼んだのはクロッケパンのはずだぞ』

「いや、クロッケパンが売り切れていたんでなんか似たようなやつ
買つてきました」

そう言いながら僕は、ビニール袋の中から一度揚げた物を挟んだ
パン……カツサンドに当たるもの食べようとしたらエリザベスが
急に振り返り刀を薙いだ。

僕はそれを上半身を後ろに倒すことで避け、その勢いのまま後方に一回転した。

「何するのさ」

僕は急に攻撃してきたエリザベスを見ると、『なんでお前がコロッケパン食べているんだ。コロッケパンは俺のもので、お前の食べようとしているコロッケパンは今は俺のものであり、さらに言うならこの教室のコロッケパンも俺のものとなる。コロッケパンが売店にないならパン屋にまで行けば売っているだろうから買つてこい！！それは置いといて、れんほうつてどう書くんだっけ』

「お前が行けよ。あと、長い。そして知らない……と言いつか書かない。そしてこれコロッケパンじゃなくてカツサンドだからエリザベスを蹴つてからそんなセリフを呴く。思ったよりも軽かつたな。

蹴りで少し後方へ飛ばされたエリザベスに追撃はしない。なんか追撃したら中から誰か出てきそうだし。

「痛いです！何をするんですか！？」

「その喋り方は、八九時か」

急に喋ったと思うとどうやら知り合いが入っていたようだった。というかなぜ八九時が入っているのだろう。お前、幽霊だろ。

「とりあえずそれから出たら？」

「それもそうですね」

そう言って八九時はエリザベスの着ぐるみ？服？みたいな白いのを脱ぐ？ために口の部分を開いて出ようとしていた。

がさつごそ ずりゅう

「止める！八九時！口の部分から出ようとすると！そんな口から何か出すのは忍者とナメック星人と中にそこら辺のおっさんか入っている白いペンギンみたいな生物だけで十分だ！！」

「それだけの人分かるんですか？！」

最初のはまだしもあとの一つは大体分かるような気がすると思つ

が。白いペンギンみたいな生物は口からいろいろなものが出来るが忍者の方もいろいろ出せる。……奴らの中は四次元ポケットか！！

「エクスカリバー エクスカリバー」

僕はそんなことを言いながらシルクハット（黒）をかぶりながら歌つていた。

「全く関係がないですよ、やがみさん」

「どのやがみさんだ。僕が知っているやがみさん一人だけだ。それに僕は『テスノート』を持つてないし使つてもいない。そして本の中から家族となる存在が出て来た少女でもないぞ。僕の名前は八雲だ」

「失礼、噛みました」

「違う。わざとだ」

「かみまみた」

「わざとじやない！…」

久しぶりに八九時と話すがたまにわざとやつているんじやないだろ？かと思うのもあるんだがどうなんだ？あとメタすぎるんだがそれはどうなんだろう？いろいろと対応に困るだが、それにネタが分からぬのも混ざつていて作者が完全に対応できなかよ。気にしない方が良いと思うんじやが

「秀吉か！－アウトだ！アウト－！」

本当にアウトである。他の中の人ネタをやりそうで怖いんだが。

「それなら……僕と契約して、魔法少女になつて欲しいんだ？」

「誰がなるか。それに僕は男だし、君が持つているモノ完全に違うだろ。それに、何でここに居るんだ」

一番気になるのは何で八九時が

「確かにそうですね。まあ、此処に来たのも迷つたのが原因ですし

「やつぱりそうなんだ」

元々、迷い牛だったから、二階級昇進したとしてもその影響の一部は残つていたのだろうか。

このやり取りを完全に理解している人は何人いるのだろう。

理解している人は未来から来た人が転生者とかだろう。ネタ的に…エリザベスの衣装はどこから持つて来たのだろう。

……あれ？僕とハ九時のやり取りって見えない人から見たら痛い人じゃないか！？

ちょっと待てちょっと待てちょっと待てちょっと待てちょっと待てちょっと待て

あれ？でもエリザベスの衣装？は全員に見えてたんだよな。いや、もう…………いいや。めんどくさいし、考えるのをやめよう。

「今私はマテリアルです」

「なにそれ？色違ひの奴？ハ神さんから繋がっているのか、それ？」

「違います。マテゴの方です」

「お前どこ行つていたのあおおー！」

完全に別世界だった。パラレルワールドと言つぱり完全に別世界だ、異世界だ。原作の基とがが違うから、繋がりとか無い筈だし。碧陽学園に行つたことあるけど本当につながつてないよね。つながつてないって誰か言つてくれよ。……あ、パソコンでマテゴの事件や碧陽学園検索すればいいんじやないか。

「そして、今なら時間の果てまで飛べそうです」

「飛ばなくていい」

閑話休題

「まあ、そんな訳で此処に通う事になったハ雲です。もう帰つてもいいですよね」

あの後、ハ九時は、「北海道に行きます」と言い残し出て行つた。元々北海道に行くつもりだつたらしいが迷つた結果、此処に着いたらしい。ハ九時のことだから別のところに行きそうだな。

今、僕はハ九時との会話で最低限の紹介があつたからやらなくてもいいと思ったのだが、駄目だつたみたいだ。

コマンド

たたかう

どうぐ

にげる

にげられない

という事である。

この教室に居る全員はあの会話に着いて行けなかつたため、自己紹介をし直した。

ああ、今家にあるポケモンが無性にしたい。

「質問がある人は手を挙げてね」

この担任は人の許可を取らずに何勝手に進めているんだろうか。そんな考えと裏腹にほぼ全員が手を挙げた。さてさて、質問に答えられることがどれだけあるかな。

その中で一人急に立ち上がり

「質問だつたらまず2 - A報道部の私、朝倉和美が進行させてもらうよー！」

「パパラッチ……てめえーは駄目だ」

「えつと…なんで？」

「昔、パパラッチが取材つて言つて有無を聞かずにやつたことがあつてさ。それで、すぐに終わると言いながら朝から夕方になつていつからパパラッチに関して質問関係はさせないようにしてる。その後そいつの行方を知る者はいなくなつたからね」

僕はそれを笑いながら言つたが、全員が最後の一言で青ざめていった。

「最後の部分は戯言だよ。」

それを伝えると、青くなつていいた顔に血が回りだし顔色がよくなりながら安堵の息をついている隙に真実を言つ。

「正確には全治半年の怪我を負わせたが正しいか」

結果、全員が顔色が戻りました。青白い方にだけ。

「まあ、そんなどうでも良い真実は置いといて、僕は何と言えばいいんだい？あり当たりな事から言い始めようか。趣味は特にないけ

どあえて言つなら睡眠もしくは読書。特技は、一回見たことをほぼ完全に出来る事。でもさあ、自己紹介で趣味や特技を聞いてもそれでどうしたの?って思うんだよね。それを聞いても、その人の印象と違つたなんて言われても困るんだよね。勝手に間違えたくせにそれをその人のせいにするんだから。責任転嫁にも歩度があると思うんだ。人の言つたことをそのまま勝手に信じて、それが真実かどうか分かつてもいのにそれだけでその人の印象を勝手に変えるのだからね。本当なんてこの世にないのにどうして探そうとしたりして、そこにあるのは現実と幻想だけなのにね。自分で作った先入観で物事を捉えるなんてバカのやる事でしかないんだよ。『正義の反対は別の正義』つていうけどそれはどちらも正当化するだけでしょ。『勝てば官軍。負ければ賊軍』なんて言葉があるんだから、『正しい。正しくない。それに関わらず正義は必ず勝つ』つてことになるのや。自己紹介終わり』

無反応

そう言つのが良いくらいの静けさだった。正義云々は前から言つてみたかったんだよね。なんかかっこよくない?僕だけなのかこの感覚を持っているのはだとしたら直しておこう。

帰つていいかな?

帰つていいかな。……え？駄目なの（後書き）

正義云々は結構ありますよね。人によって捉え方も違いますし。
感想などがありましたらよろしくお願いします

■□紹介について……やっぱり帰つたら駄目？（前書き）

描くのには時間がかかるなかつた。時間が取れない。時間を操る力を下さい。文才下さい。欲しいものだけですね。では、じゅつくりと……

自己紹介につ！……やっぱり帰つたら駄目？

僕は全員が沈黙した後教室を一人静かに出た。

一応言つておく、帰るわけではない。単純にさつきまで食べていたパンを食べ終えそれでも小腹が空いたので何か買って来ようと思つただけである。ほんとだよ

それで学校に来る途中で見つけたミスドに入つて品物を定め終えた後に、

「全種類6つずつ下さい」って言つた時の店員さん全員の顔は少しだけ忘れられない。

見ていて最も大変そうだと思ったのは、箱詰めの時だつた。全種類一個なら如何にかできたんだろうけどそれを6つだから余計に大変そうだった。気にしないけどさ。

その後、ドーナツを持ちながら、まだショートしているだろうクラスメイトの居る教室に戻つた。

七花の自己紹介からの急展開についていけずに気絶していたと言つても、何を言われているのか分からなかつたから起きたことだが、自然に回復するくらいのものである。

だからと言つて、目の前の状況を見て不思議ではなく、啞然とするのも可笑しくないだろう。

教卓から右側にある空間に一つ不思議なものが鎮座している。御柱が真つ二つに割れた状態でそこに人が乗つているからと言うのもあるが、その周りにあるミスドの箱の量もおかしいのだ。

基本的に買つても1、2箱くらいで済むが尋常じやない数の箱が置いて……落ちている。異常にある箱の4分の3は空になつてゐる。多くの人数で食べているならまだ理解できるかもしれないが、その光景を作つているのが一人だから余計に性質が悪い。

意識が回復した生徒の一人がこの光景を作つている二人に質問し

た。

「あの～、これどういう状況なの？」

「御柱が降つてくる。破壊してからドーナツを食べてる。ただそれだけだよ。あと、君だれ？」

七花から見て此処に居るのは知らない人物の方が多い。知つているのもいるが敵意を向けられていたりなんでここに居るんだろうと、いう疑問に観察するような視線がある。ただ、朝倉はさつきの出来事がまた起きるのではないかと思つて黙つている。

故に、質問できる人物も限られるのだろうがその辺りは、2-A クオリティーで何とかなつてしまつ。

「えっと、私は椎名桜子だけど」

その瞬間、七花の箱からドーナツを取る動きが止まった。

「し、し、椎名？」

おどつきながらも苗字を聞き返した。

「そうだけど。どうかしたの？」

「熱血漢の姉とインドア派の妹がいる椎名さんの親戚じやないよね？」

「いないよ」

その返答を聞いて一息ついて、

「よかつた～。老山龍を一人で狩りに行ける奴と、戦闘力がマイナスの妹と知り合いじゃなくて」

「いやいや。前半おかしいよね！ PSPの中だけよね！ それと戦

闘力マイナスってどんな状況！？」

「なんでそんなに慌てているのさ？ 前者についてだが木製バットを振れば壊れ、金属バットを振れば欠けるし、キヤツチャーのポジションからホームランボールを取りに行き、円盤型の飛行物を『FDF！ FDF！』って叫びながら撃ち落とし素手でモンスターを狩りに行けるだけだった筈だよ。後半の方は戦闘が始まると相手に介抱されるくらいの戦闘力だけど、覚醒するとコンパスを高速で投げることが出来るし、『戦士を倒せる位の戦闘力を発揮できるけど、イ

ンドア派の王つて言つても良いくらいのダメ人間。1時間ゲームしてゲーム内のプレイ時間が3時間にすることが出来る、位だけど

「どっちもおかしいよね！？」

聞いていた全員が突っ込んだ。

だが、悲しい事にそれらは意外と事実だつたりするのだからどうしようもないのだ。

「ああ、前者の姉は通つている学校で七番目に強い」

「なにその補足情報？！必要性あつた？！後、それだけできて七番目に強いつておかしいよね？！」

「碧陽学園ではよくあることだ」

「あつて欲しくないし、なつて欲しくもないよ……」

「あのね、碧陽学園に普通を求めたら駄目だと思ひよ」

「？…なんで？」

思つた通りの普通の人の反応だね。

「忍者はいるし、神様と知り合いの人はいるし、超能力者もいるし、地下に拷問所があるし、調理実習で、スライム状の生物は出来るし、体育の時間で殺し合（もどき）はするし、思い違いで学校を巻き込むし、生徒会でゲームをするし、本を書くし、ゲームを作るし、フィギアを作るし、アニメも作るし、カードも作る。これらが起ころのが碧陽学園だから」

「嫌な学園ですね！…むしろ、リコールされない方がすごいですね」

「？…そう？…ああ、あと、クラスのほぼ全員がストーカーもしていたりするね」

「そのクラスは一体何をしているんですか？！」

「地域に貢献しているんだよ。いろいろと……ね」

「一体何を貢献してるんだろうね？！」

そこに思い出したかのように呟いた。

「ああ、幽霊もいるんだつけ……」

その呟きが異様に聞こえた教室の中では、一息つくくらいの溜めを置いてからまた全員の顔が青ざめた。青ざめるよつたと言つた

つけ？

「ゆ… ゆ、 幽靈見えるの？」「

「見えるよ」

そう言つとクラスは喧騒に包まれた。五月蠅い。

「私、見えるんですか？！」

幽靈がやつて来た。見えるつて言つてから即座に来たな。

やつて来た幽靈に対しても顔を縦に振ることで答えを返した。そう

するとその幽靈は喜び跳ねた。幽靈なのに跳ねられるのが。

そう言えば、幽々子さんつて足あるよな。亡靈なのに……その例で行くと、妖夢の半靈は足が無いな。けど、プリズムリバー三姉妹は足があるよな。うーん、不思議だね。そう言えば、死後の時は僕の場合あつたな。今はどうなんだろう。やる気ないけど。

まだ五月蠅いから今日だから許されるネタを使う。

「嘘だけね」

4月1日にのみおける必殺技。トーブリルフル（ドラえもん風）
〔二〕

これを使つ、もとい、言つと今まで騒いでいた教室の中が静かになる。

そしてまた誰かが、

「嘘だつたんだ～」

と言うが、

「背後靈か守護靈だつた氣がする」

「嘘だよね？！」

この調子だと終わりそうにないので、

「幽靈の件だけ」

『其処だけ！？』

全員にツツコまれた。関係ないけど『つっこみ』つて、変換すると『突つ込み』？『ツツコミ』？どっちなんだろ？へ。

「えっと…じゃあ、もう一回質問からしようか……」

どうしたらそんなに疲れたような顔が出来るのだろう? 今日は始業式だけだった筈だけど。

「はい。質問です。パパラッチじゃないですか」

「まあね」

「だったら、クラスの代表として質問すわせてもいいですか」

「いいんじゃない」

僕は、御柱に乗つたまま適当に返す。

ドーナツも食べ終わつたので、箱を畳みながらいるけど、数が多いから面倒である。

「それで何を聞きたいのさ」

「基本的な事を詳しく」

そう言いながらペンと手帳を持つてるので、畳み終わつてまとめてある箱を顔に投げつけた。それが良い感じに顔に当たつた。見た感じでは、箱を畳んだ時の角に当たつた。

「パパラッチなんて後ろから刺されて死ねばいいのに」

「それ酷過ぎない?!」

僕から見たら面倒事しか持つてこないのだ。

「名前は八雲七花。身長は今は169cm、体重は40前半だった筈。特技はいろいろ、趣味は社会に蔓延る「み掃除」

「趣味は嘘だよね?!!」

いくら常識を壊すような事をするからと言つてそんな面倒な事するわけがないだろう。殺るのだったらばれない様にするし、他人の犯行に見せかけるしね。それに、向こうつから突っ掛つて来なければ基本的に攻撃に移らないし、そんな事する暇があつたら積み本を読んでるね。

「面倒だからしてない(嘘に決まつてるでしょ)」

「本音と建前が逆になつてる!...」

しまつた。考え事をしていたら、本音を言つていたようだ。

「本当の趣味は、相手の傷口に塗る事かな

「ドドー！」

「むしろ、傷口を開いて深くしてから海に投げ込むことかな

「鬼畜ッ！？」

「そこから縄で縛つて鮫の居る所辺りまで引っ張りまわして喰われる直前で回収して絶望と恐怖で染まった顔を見ていたいね

「人間の考える事じゃないよ…？」

「嘘だけど」

「此処まで引っ張ってきてそれを言つの？！」

むしろ引っ張らないと面白みがない。やるからには徹底的にやるか、怠けるかの一択しかないからね。

「それもあるけど、最近だと読書だね

「結局、嘘じやないんだ」

此処で言つた嘘は、嘘が嘘だと言つ本当に判り難くしているだけなのだよ。

「はいっ…」

誰？さつきクラスの代表として質問するつて言つておいて、別の人気が質問しているけど。

「性別はどうちですか？」

「はあ？」

何を言い始めるのでしようかこの子は？お蔭で、その子を見る田が馬鹿かな？から完全に可哀想な子へとランクアップしました。良かったね（可哀想な眼をしながら言つのがコツである…何のコツだろうか？）

「男ですよ。女だったら制服着てますよ。そついえば此処に居るのつてエイプリルフールのネタですよね？」

そう言いながら、教卓の前に居る教師に問いかける。

「えつ？僕は、女子つて聞いてたけど…
なん……だと。

血口紹介について……せっぱり帰つたら駄目？（後書き）

前書きで述べたように時間の確保が日々を過ぐしていくと難しくなつたりします。

書く時間があるのに、読みにのめり込んでしまうのはなんとかと思いながら、チマチマと書いた結果がこれでした。

区切り方、おかしくないか？と思つたりもしましたがこれ以上書こうとしたら元々進んでいる方向がおかしいので、右に進むはずが前に進んで左に進んだ後さらに左に行つて、また左に行つてから本筋に戻つて来そうな気がします。事実、ありそつな気がします。

誰か、何らかのネタはありませんか？一応ここはあるんですけど、地味に長編系なので暇潰しで思い付いた方が居るのでしたらお願ひします。

感想などがありましたら、お願いします。

何でもかんでも他人の性にしてはいけない…どこかに自分が関わっているから

書く時間がない…むしろ作れない、なら少しずつ書き溜めるけど路
線変更する事があるからほとんど書く時間が変わらないのは何故?
そんなことを思つ今日この頃

何でもかんでも他人の性にしてはいけない……とにかく自分が関わっているから

教室の中は変な空気になっていた。理由は、僕が男であるという所だろうか。

さて、あのダメ人間もとい駄目妖怪はなんて面倒な事をしてくれたんだろうか。昔に書いた戸籍には男としつかり書いておいたはずなのだが。

見た目が女みたいだから?世の中には男の娘と言つのも居るんだから見かけで判断したら駄目なはずだ。それをあれば勝手に判断したのであるから殴りに行つても問題ない。証拠を残さずにきつちりやれば大丈

夫なはずである。殺るからには自重してはいけない。

そう決めて一言つぶやいた。

「よし、(殺しに)行こう」

「いや何処に?」

少しばかり俯いていた顔を上げて質問してきた朝倉に

「決まってるじゃないですか」

「学園長を殺しにだよ……あれ? 理事長だけ? どっちでもいいか。今から殺しに行くし

『よくないでしょ!』

全員からの総ツッコみだった。

「人間……いや、男にはやらなければならぬことがあるんだ。だから

「

そう言つて、隠し持つていたナイフを取り出して、

「君らが邪魔をするなら氣絶るよ^ヤ」

その一言に少しばかり敵意を乗せると六人くらい反応した。ルビと言葉が違うのに気付かないとなると、敵と見られたことに反応したという事になるが、それに反応して殺氣を見せてるのが一人。敵意つていうのも曖昧だから邪魔したら怒るよ、ってくらいだつ

たんだけど此処まで過剰に反応するとなると、沸点が低いのかつて思いたくもなる。むしろ低いのであろう。敵意と言つのは、自分に危害を加えようとしている相手、自分の利益の達成を阻害している相手、戦場における交戦相手に向けるのであり、それ以下だと七実さん風に言つ草である。

つまり、見る必要のないものである。一回見た物を完璧に使える見稽古だけど、今更見るモノも無いのである。

剣術なら鎧一族と妖夢、槍術、弓術なら某願望機の戦争で見た。
遠距離なら弾幕。移動ならスキマ。拳法なら美鈴。特殊技能なら真庭忍軍。にわにま 僕からみて、十分過ぎるくらいである。他にも見たがそれらを使う機会があるかと聞かれたら答えられないから、ある程度取り出してこの位である。

それに怪異も語られる数だけ多様性がある。例えば、吸血鬼なら伝承道理のものもあれば型月のように多様性のあるものまである。僕自身の怪異は白沢と天狗？と思われる。前者の方は知識を与えるという伝承があるのでそれを見えるようにしてから確認したりしている。そうすれば異常でその怪異の力を使う事もできるからである。後者の方は生まれに関係するらしいが、幻想郷の天狗に聞いても分からなかつたので、新種の妖怪なのではないかと一時期話題になつた。あまりにウザかつたから血祭りにしておいたけど後日復活していた。奴らの回復力は化け物か！？って思った時もあつたと思う。「まあ、自然回復する程度にするから大丈夫でしょう」

「いいえ、駄目です」

ふむ、ナイフで攻撃するのが駄目なら……

「刀なら良いのかな？」

そう言つて右袖から刀を取り出した。そんな中で彼女たちは出しへから刀を認識すると、

『好くないよ！』

全力否定されました。だつたら、と思いながら、

「何をそんなに叫んでいるんだい？カルシウム足りてないんじゃな

いかな。牛乳飲む?」

「何処に居るんだいその人は」

『おまえだらうがああああああああ！！』

モニタリングシステム

「好。」亞拉丁總把二女打發了。

たいへん、たのしゅう、じぞこました。

「まあ、学園長?は自然回復する程度の折檻にしておくよ。良かつたね」

いや、あんまり変わつてないけど

何を書いていたのかな?折檻と丸窓が分か離してしまった。

「ルニス」、
アーヴィング

『行くの？！』

また、全員からのツッコミだつた。

そこで、何が悪いのか分からなかつたのでとりあえず

「それでも持つていれば？」

そう言って袖から出した黒くて四角いもの（爆発はないよ）を

朝倉に投げ渡した。

「なにこれ？」

……ノノヽヽチたゞ持ててゐるか知ててゐると思つたんだけど知

111

「何で持つてゐるの？」

その質問には答えられない。家とかに仕掛けられたのを回収して

仕掛けた奴に反撃しに行つたついでにパクつたなんていえない」

「うめん。家のあたりから聞こえてるんだけど」「

あれ？僕つてこんなキャラだけ？いやいや違う違う。もつと何かこう不思議とカオスにしていくようなキャラではなかつたけ。いや違うな。キャラは元々決まってないよつな感じだった。なら、自重は要らない。

「まあ、折檻の様子を聞いていればいいと思つよ」

そう言つて教室を出て、学園長室を目指した。

「行つちゃたんだけど」

普段から五月蠅い2・Aの教室にその誰かがこぼした声が異様に聞こえた。こぼした本人も朝倉の持つている盗聴器の方に目を向けており、クラス全体が聞くか聞かないか決めかねている。

「どうせなら、聞いてみればいいじゃろ？ 危なくなつたら電源を切ればいいのじやから」

!!

その声のした後方に全員が振り向いた。そこには白い肌と金髪金眼、時代がかつた喋り方をするくせに名前は日本のものと言ひだすナツツ好きの吸血鬼もどき、忍野忍だつた。と言つても、吸血鬼であることはこの学園都市に一人、二人いるかも知れないくらいであろう。

「そ、そうよね。クラスメイトの事話ることも必要だし」「上手くいけば良い記事が書けるかもしれないし」

「面白そудし」

その場にいる人たちは自分を正当化するようなことを言いながら、朝倉の周りに集まつた。集まつてなくとも聞こえるであろう者たちも自分の席を立つてゐる。この場を押さえなければならぬ教師も来てから今まで自由にやつてゐる生徒が今度はどうするかという事を気にしているために止めていない。

それでいいのか教師。

「それじゃ、入れるよ」

朝倉が確認すると周りに居る人たちはうなづき返した。それを合

図に電源を入れた。

* 『こから先は音声のみです

『この辺で良いか』

ガタツ

『よいつしょつと……』

ガチヤリ

『グッバイ、学園長。あの世で閻魔の説教でも永遠に受けとくだけ
え』

バツシユーネン

ドカーン

ザツザツザツザツザツザツザツザ

『学園長生きてますか～？と言つか生きてますよね～？』

『お主はこきなり何をするんじや！死ぬかと思つたぞ』

『ツチ……しくじつたか』

『今お主、舌打ちしたじやる。しかもしくじつたとか言つたじやろ』

『何言つてるんですか。ひ～……あ、間違えた。何言つてるんです

か。ぬらりひょん』

『言い直したじやろ、しかも学園長室にバズーカを撃ち込んだくせ
に』

『何言つてるんですか。お茶田ですよ。お茶田……いつもの事じやが、
ないですか』

『儂、バズーカを何時も受けれるような生活はしていなーんじやが、
こつち見てくれんかの』

『ロケットパーンチ』

『グッハ』

『お主一体何をするんじや』

『見ればわかるでしょ。ロケットダンスですよ』

『無駄に上手いから余計に腹立つんじやが』

『ああ、じゃ分かりました。ほら、爺さんこれ持ちな

『ねえ、なにこれ？何で刀持つてんの？』

『死ね～死ね～、死ねよ士方。お前頼むから死んでくれよ～、死ね～、ツパン死ね士ト』

『…………あ、もしもし警察ですか。目の前に刀を持ったぬらりひよんが居るんですけど…………つえ？おい、ふざけんじやねえーぞ、税金泥棒ども。どうせろくに仕事してねえくせに…………んつだと、ぱとかー走らせて巡回しますよーって見かけだけしかやってないくせに何言つてるんだよ…………いいんだな、てめーらが裏でやっていること全部表に出してもいいんだぜ…………そこまで言うんだつたらやつてやるうじやねえーか。警察なんて見かけだけだろうが、てめーら『ブッシン

え？学園長を折檻しに行つて警察に宣戦布告したのはなんで？

『どういう流れから警察と敵対するはめになるのだろうか？

そんなことを考えながら電源を切った盗聴器に目を向ける。さつきまで盗聴器から流れていった音でそれなりに騒がしかった教室の中はさつきよりも静かになっていた。

原因はやはり内容であるのだろうが、警察に対してもんな事を言えるのはどういうア見だらうか？分かるかどうかは分からぬモノである。

しかしながら、よくよく考えてみると携帯をかけたのか、かかつて来たのかどちらなのか一目瞭然でありそのかけてきた人物に合わせたのかそれとも合わせてもらつたのかは当人しか知らないであろう。

まあ、折檻から帰つてきたのはどういう訳かにこやかになつているのはストレス発散できたからだろうか。周りからみれば何をしたのかいまいち解らないものもあるため、また質問攻めになつたのも一興の一つであろう……多分。

何でもかんでも他人の性にしてはいけない…とにかく自分が関わっているから

感想などがありましたらよろしくお願ひします。
キャラあつているのかが一番気になる所

喋つてぱっかりだと進まないよね（前書き）

少しだけ進みます。本当に少しだけだけ…

喋つてぱっかりだと進まないよね

Q 「あなたはあそこで何をしてましたか？」

A 「学園長を虜めてました。」

Q 「老人虐待と言う言葉を知っていますか？」

A 「あれは、妖怪もどきであつて老人ではないので虜めてもOK。」

Q 「途中何してました？」

A 「バズーカを外から撃つて、部屋に入った後生死の確認をしながら少し会話して陥れるタイミン g.. ジゃなくつて、えっと、指示を聞いてからロケットパンチから始まるロボットダンスをしてました。」

Q 「指示つてなんですか？」

A 「知り合いからの攻撃方法の指示です。」

Q 「途中で聞こえた呪いみたいなのは何ですか？」

A 「携帯の着信音です」

Q 「この状況は何ですか？」

A 「質問してるだけです。」

「嘘だ……」

ひぐらしが鳴く頃でもなく北海道の生徒会副会長が会長を口説いてるわけでもないですが、言つておかないところの質問地獄から逃げられそうにないので切り替えるために言わせてもらいました。

「何処の世界に質問のために人を縛利上げる集団があると……いつ……んです……か」

僕は言つている間に質問中に縛るではなく質問するために人を縛る集団……いえ、面白そうという理由で縛らうとする集団が居ました。上記の某生徒会に居ました。最新刊にありました。僕の方は質問に

答えるも上手くツツ「みをしてもくさやや、牛乳を浸み込ませて三日経つた雑巾は貰いませんから、と言つか貰つたら死んでしまう気がするんですけどね、僕の場合。

感覚的には逃げ足の速い金属スライムです。防御値が二桁あれば良いなって言えるくらいの低さです。体力は一桁後半でそれら以外が軽く三桁越えをしているという、アンバランスチートボディーになつております。……誰に言つているんだろ？

「とにかくその手に持つているモノを放しなさい、忍！！さもない僕は死にますよ！！あなたの持つている危険物によつて昇天してから靈体化してチート能力で生き返つたような生き返つてないような人物がごとく復活しますよ！！ですから、その外道麻婆豆腐を捨てなさい。何処で手に入れたのですか、それ？……超鈴音が作つた？誰だか知りませんけど作らせないでください。自分から作つたら作ろうとした理由とレシピとそれに関係する記憶を今すぐ捨てなさい」

ちなみに今の僕は学園長を折檻してストレスを発散したおかげで笑顔になつて帰つてきた後、一番後ろの列の適当な席に腰を下ろしたら静かだった教室内の生徒が一斉に襲い掛かつてきました。……正確には動きを出来るだけ封じて、リボンを器用に操つて椅子に縛りつけた後、さらにその上に縄を巻き付けられたが正解です。構成人数は6人！！半分以下の人数でした。

「あ、ありのまま体験した事を話すよ。後方で縄で縛りつけられた後教卓の前に居た。何を言つているのか分からないと思うけど、僕も何をされたのかは分かつたけど、移動した瞬間は完全に判らなかつた…頭がどうにかなつたかと思つた…催眠術だとか超スピードだとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてない。もっと恐ろしいものの片鱗を味わつたよ」

「何言つているの？」

「キン・クリ体験者のセリフ」

知らない人は知らない。知らなかつたらググる、だいじょーぶ。

知らない人は知らないネタだから。

けど知らない人が知つてゐるネタつてどうこいつネタ？

まあ、そんなことは置いといて、

「なんでそんなに君たちは僕の状態を見てにこやかなのかな？そんなに…そんなに憎いのか僕を！！」

「今までしてきた事を思い返せばいいと想ひよ」

即答だった。

そこは否定して欲しかつた。と言つのは嘘で、もうひよつと溜めるとかして焦らしてから落とした方が楽しいでしょ！が…

「そういう問題じやない！」

僕の周りに居る女子の一人がツツ「こんだ。金髪碧眼で近所のおばあちゃんとかが『人形みたいだね』って言いそうな口りもとい幼女もとい成長率が悲しすぎる子供である。名前は知らない聞いてないから。

僕は口に出していらないのにそれを理解するとはまさか…さとりの一種なのか？

いや、待てよ……

「あそこの姉妹の家庭状況に至るまでの過程はよく分からぬけど、昔の家庭を仮定の家庭として考へると今に至る過程にまた別の仮定が入つてくるから、それを仮定として考へてみると……「ん、まったくわからぬ」

「かていだらけえええ！」

どうやら今度は口から出でいたらしい。発音が上手い人なら同一音訓の単語を発音すると分かる様に言えて、そのうえでさらに長くしゃべれるだろ？

「だつたら、試しに……お題『れい』」

「お題！？急すぎるよ！？またついていけないよ……」

「靈の例つて言うと都市伝説や怪異みたいなものがよくあって、その中で靈を扱つたものはかなり多いんだよ。怪談とか話すときには靈とかそこいら辺に居そうとされるものが多いのはいないと信じながらそこにいることにしてるからでもあるし、そういう意味ではお盆なんかは先祖の靈に礼を返すという意味でやつてているのかもしけないけど、段々そう言う事 자체されなくなつていったりするし、都市伝説のように話されることが意味があつたりすることもあるし、その例がう～んと…中に居るやいいかな？靈の例として言うナビ…」

「飽きたからもうこいや」

『えー』

何？この連携力はあれなのだろうか？普段は喰い付かないのに、こいつちが引いたりしたら喰い付いて来るような感じなのだろうか？よく分からぬけどたぶんそんな感じだろ？

「と言づか、むしろこの状況を進めないといけないんだよ？いい加減にしないと怒られるし、場面が進まないことで飽きていく人もいるんだからそろそろ進めないといけない事分かつてる？」

『お前のせいで進まない事分かつてる？』

ああ、分かつていい。分かつてはいるさ。

だけどなんで女子中に入れられたのかと言つ事が気になつていてから進まないんだ。

つまり、正解がでないと先には進まないという事なのが。

クツクツク……ハツハツハツハツハ……はつはつは……

これ、誰？リリカルなまほー少女の三期ボス？よく知らないけどね。そんな感じだった気がするからそつと言つ事にしておけばいいと思します。

なので誰か答えを教えてください。それ以前に僕の戸籍登録したの誰だつけ？

「（テス、テス。出番が少ない東方組です）」

「どういうタイミングでの告白…？確かにそうだけど出でてきたら面倒だから！教室内のキャラですら書ききれないのにこれ以上（キャラが）増えたら、（台詞や場面が）どうしようもできない…！」

僕が急にツッコミを入れたことに驚いていた。ボケてもないのにツッコミ入れるのは痛い人くらいだろう。こんなこと（念話もしくは脳量子波的な何か）が出来るのはスキマ妖怪と鈴仙くらいかな？と言うか、どちらにしろ何メタなことを言つてやがるんですか。

「（もしもし、こちらハ雲。応答を求める）」
返答がない。

もしかして、さつきのがやりたいが為に通信したとかじゃないよね。

「（こちら、ハ雲。そんな事ないわよ）」

それでもなかつたらしいがどっちもハ雲だと混ざるよね。どうでも良いけど、しゃべり方で分かるだろうから。

「（一体何のようでしちゃうか）」

僕はうんざりと言つかあきれながら聞いた。

「（あなたが、戸籍の性別の答えを聞きたそうにしていたから教えてあげようと思つたけどやめようかしら）」

「（急に出てきて、急に考え変えたね）」

「（そうね。あなたがその状況から何かボケれば教えてあげてもいいわよ。ただし、そこに居る全員がええばだけど）」

「Unnaturalだ！無理すぎる！ベテラン芸人でも出来そうに無いでしちゃうが！」

「（大丈夫よ。あなたは『相手を笑わせる程度の能力』を見取つているのだから）」

「（生憎ですけど僕のログにはそんな能力無いのですので早く情報を教えてください）」

周りが僕を見る目は確実に痛い子と言つよりも変人でしかないだろうが、そんな事よりもさつさと情報を教えて欲しい。

「（それはねえ。私が戸籍に書いてある性別の境界を弄つたからよ）

「

……予想はしてたけど何でそんなことしてるんですかあなたは？いくら暇潰しに異変を起こそうとする人よりも性質が悪くないですか。

溜め息をつきたい。既に吐いてはいるのだがどうも吐き足りない。そんなことを思いながら、体と椅子を縛っていた縄を外して立ち上がる。

周りがどうやって外したのか気になつて騒いでいるが僕の気にしたことではないので、無視しながら家の母親に当たる人物・妖怪と話しを続けた。

「（なんでそんな暇潰しになるかどうか分からぬことを…）」「（特に意味はないけど七花と七花じゃ違うでしょ。あなたは七花であるのだから偽名のついでに性別も偽つておいた方が良いでしょう？）」

「（……なんで、そう言つ事は先に言わないのかなあ。）」
今思うと幻想郷の住人は快樂主義者が多すぎるだろうし、異変の目的が達成されなくてもいいと言つたか何と言つたか解決されてもいいやと言う樂觀者なのだろうか。

まあ、現在進行中の異変は如何しようもなく住んでいる全員が放置しているのだが……

十年近く幻想郷内の時間が巻き戻つたと言う誰が何の目的で起こしたかも定かでなく、ただ、幻想郷に居る住人の年齢と外見が当時に戻つただけで、人の記録や記憶、持っている物も変わつてないという異変である。

淡々と見てみると幻想郷に入つて来た山の神社がそのままあることや天界に旧地獄、冥界に普通に行き来できるくらいしか変化がないために放置されたものである。

他の所では身長が縮んだ、身体的一部分が無くなつたなどと判明したとされる。まあ、僕もそれに巻き込まれた身だから何とも言えないけど、特に被害はないので問題はなかつた。

女子の一部が嘆いたけど僕は知らない、知りたくないし、関係ない！

「（情報伝え終わつたから切るわよ）」

「（あ～）」「

僕はそんな感じで適当に返事を返し念話もしくは脳量子波での会話を終えた。

会話が終わつたついでに僕は縄抜けをしてから立ち上がつた。

そしてこの一言を言う

「帰つていですか？」

「歓迎会するから黙目

却下されました。

約一時間後、歓迎会の名をした小パーティーは、昼過ぎまでしてました。

喋つてばかりだと進まないよね（後輩や）

感想などがあつましたらよろしくお願いします

東方から一人出るよ～（前書き）

タイトル通り

幽靈と人外とパパラッチ

答えは

東方から一人出るや

歓迎会と言ひ名の酒なし、質問ありの宴会が終了した。

片付けはやつておくという事を言われたので教室内に居た幽靈を引きずつて教室から出た。

その幽靈…さよと言ひ名の幽靈の襟元を引きずりながら廊下を歩いている。引きずると言つても地面と接触しない。けど扱いでいる訳でもなく負ぶつている訳でもなく、抱っこしている訳でもなく、引きずつているむしろ漫画である、襟元を掴んで走っていてそれで体が浮いている状態に近い。

幽靈とは言えども触れられたらそこには質量があるから重さもあるはずである。

だから、結局のところ持つのが面倒なのである。

僕が帰ろうとした時に急に引っ張られたよの方は僕に質問してきた。

「あの、……どこに行くんですか？」

「その質問の答えは簡単だよ。まず理由の一つ曰く、話が出来る場所に行く。つまり、今ある候補として今の所一番安全な僕の部屋。二つ目は、教室に居る呪縛靈もしくは浮遊靈を放つておくと『ぐらやみ』が出て来る可能性があるので成仏もしくは体で今世を過ごさせらる。ただ、後者の方は人の寿命よりも長いから孤独になる可能性がある。……まあ、可能性だけだけだね。三つ目は特にないや」

結構あつたりした内容となつてゐる。強いて言ひなれば四つ目は暇

潰しと偽善みたいなものである。

「はあ～

質問してきたさよも何とも言えない理由に呆れている。ナンショ
ンの上がり下がりが激しいな。

「」の話を終えるころには学校を出ていて駅の屋根がしつかり見え
るくらいまで歩いている。忍法『足軽』を使って移動してもいいけ
れど後ろについて来ている尾行集団が居るので却下する為、電車に
よる移動となる。

後ろを振り返って尾行集団 2 Aを傍田にさつきまで居た学校か
ら感じる異能による監視を如何しようかと考えながら備考集団をど
う撒くかの策を練り始めた。

2 - A 視点と言つより尾行理由

最初は何げない一言だった。

「ねえ、彼つてどこに住んでるのかな？」

その一言を発したのは最初と歓迎会のも質問していた朝倉だった。
片付けをしていた少女たちの一人が手を止めてその疑問に答えた。

「それは麻帆良でしょ？なんでそんなこと聞くのよ」

ツインテールにオッドアイの少女の神楽坂明日菜はなぜそんなこ
と言つたのか気になつた。

そのことに気付いた椎名桜子が、

「結構、質問とかはぐらかしてたからね」

そのことを言つと朝倉はその言葉を待つていたかのように机を叩き
「そうなのよ！…そのせいで殆ど質問の回答部分が空欄みたいなも
のなんだから！」

そう言いながら彼女は質問の問い合わせを書いたメモ帳を前に出
した。

近くに居た佐々木がそのメモ帳を手に取り読み上げた。

「え、と、Q、何処に住んでますか？A、麻帆良 Q、生年月日は？A、君らと似たり寄つたりしたもの Q、好きなものは？結構食べたりするもの Q、嫌いなものは？A、それを答える前にお前をブツ血KILL Q、出身は？A、日本 Q、このクラスで好きなタイプは？A、それは秘密 Q、このクラスに入つた理由は？A、それは秘密 etc, etc……これ、酷くない？」

淡々と音読される内容は質問の答えとして微妙すぎるラインのモノだつた。聞いている物としても如何なのかと思うものばかりだ。その時窓際で作業していた、赤石が丁度校門に居た八雲を見てこう言つた。

「尾行……してみる？」

その一言はクラスに驚きを与えた。確かにそれを考えたが言い出すべきか思う者もいれば、あの殺氣（と思われているただの威嚇）に問い合わせようと思い個人で追居かけようとする者たちもいた。常識を持つてゐる者は何を考えているのかと思い帰宅しようとした。ただ、帰ろうとした少女はタイミングが悪かったとしか言えない。

「そうよー」これはクラスメイトと仲良くなるために家を知る必要があるのよ！」「クラスメイトとして最低限の事は知つておかないとね」「あいつ絶対強いアルから戦つてみたいアル」など自分たちの行動を正当化出来るだけの事を言つた。

いろいろと知れるかもしないという興味心とそれはどうなのかと思う罪悪感に似た物があつたがお祭り大好きのこのクラスは後の方を片付けのごみ出しど一緒に捨てて尾行を開始した。全員を巻き込んで行動を開始した。

少女たちが移動し始めた時、半壊している学園長室で高畠と妖怪ぬらりひょん、もとい学園長が話をしていた。

「学園長、彼の戸籍は女だつたのですか？」

学園長と高畠が確認した時はそう書いてあつた。しかし、

「ついたつを確認してみた所、男と書かれておつた」

矛盾しているのだ。以前と今と書いてあることが違つていいのだ。
「彼は男子の方（中学校）に送つた方が良いのではないでしょうか？」

高畠の言ひ事はあつていいのだが、既に遅いのだ。

「今日、学校に来て次の日に別の学校に行くのは可笑しいじやうりつし、あのクラスともそれなりに馴染んであるのじやうりつ？」

「……まあ、それなりには」

あれだけ自由にやつていて、ツツコみとかで済んだのは麻帆良にある結界のおかげなのだろうか？ 答えはまだ出ていなかつた。

「しかし、寒いですね」

「儂、明日もここで仕事するんじやが」

春の昼間とはいえたまに春先なので少し寒い場所があり、半壊した部分から風が入つて来る為に余計に寒いのだ。それにしてもこの爺折檻されていて明日も仕事が出来るつてどんな回復力を持つているのだろうか？ それとも折檻した時の威力が低かつたのだろうか？ 「それで、彼は如何します？」

「今は遠見の魔法で監視するくらいかのよ？」

結局のところ、犯罪染みてる。が、それを指摘しても大して変わらないだらう。

その後、学園長は遠見の魔法を使い監視を開始した。まあ、壊れた部屋にいたことが原因で後で風邪を引いたのは余談である。

どうすっかなあー、後ろから監視もしくは尾行している奴らを横目で見ながら歩いていた。さよは歩いていない。足ないし、浮いてるし。

そう言えば、出番の少ない東方組つて言い方は駄目だらうけど幻想郷在住者が僕が此処に居ること知つてるのでくらうだらうか？ 多分あのパラッチならやつて来るだらう。

取材と言ひ名の拘束を行つあれならやつて来るんじやないかと思う。

そう思つたのが運の刃きなのだらう。

前方から異様な速度で近づいてくる何かがあつた。一直線ではなく人と人の間を触れるか触れないかのぎりぎりで移動していてそれでいて速度を落とさない。

それは言葉にすれば簡単そうに見えるが人間には無理だらう。

人の流れを読み最低限の回避行動それでいていくら少ない人混みを難なく通るのはその条件に合つた道を何回も通り、慣れている者くらいであり、それがかなり速いとなると普通じゃない筈であり。多分、僕の知り合いの一人であろう。

向こうが此方を目視できるほど近くなったとき僕は回し蹴りを思いつ切りをそいつの頭に叩き込みそのまま振りぬいた。蹴られたモノは先ほどの勢いを保っていたかのように横に勢いよく飛んだ。

蹴り終わつた後そのまま一回転してから、蹴つた物体に話しかける。

「よし。死んだな」

「何殺してるんですかあ！？」

さよはこつちに向かつて来る事自体分からなかつたらしく蹴つた時に正確には蹴り終わつた時に居た物体とその時にできた風で何をしたのか分かつたらしい。

「勝手に殺さないでくれます？」

「ツチ……浅かつたかそれとも打ち込む場所を間違えてたかな。

何らかの術式を組み込んでおくべきだったか。ああ、文：お前大丈夫そうだな。さあ、帰れ」

「扱い酷くありませんか」

当たり前だ。お前ほど扱いの面倒な奴はそんなにいない。マヨヒガに帰つた来たらお前が取材と言つ名田でやつて來たりするから部屋に罠や何かとつけたりしてゐるという事は言わないでおこなへ。

「それで何の用？」

「もちろん取材ですよ」

「よし。死にたいんだな。分かつた、そこに立つてろ。一撃で葬つ

て殺るから

「あなたの場合本気ですから断つておきますよ。それと、等価交換をしていたら良かつたんですよね。此処に来るまでに見かけたお菓子屋でと思つていたのですが」

「よし、貴様ら行くぞ」

「……どんだけ~」

さよ…そのネタ大丈夫なのか?あと、その意味はどういう意味なのか聞きたいんだけどな。

怪異移動中

「なあ、文これ訴えられない?」

七花はそう言いながら先ほど運ばれてきた和菓子の饅頭を一個手に取りながら話しかけた。

「訴えられないんじゃないですか?噂だと昔に此処の店主が道に迷った時に見た生物をモチーフにしているそうですし」

文の言つた幻想郷に居る頭だけの跳ねて移動する紅白と白黒が二コ二コする動画で別の所で行動しているのが何故か目に浮かんでいる七花は言葉を紡いだ。

「十分にアウトだらうに、道じやなくて人生間違えているよつた気がするけど」

幻想郷に居るのは変わったのばかりなので、此処の店主もそれに毒されたと言うか染まつたみたいな感じになつてしまつたのであるう。

「あの~、あそこにいる人が此方を見ているんですけど……どうしてですか?」

「変わった生き物がいるから」

文と七花はさよの方を見ながらそう言った。

このテーブルに居るのは幽霊、天狗、人外である。

向こうに行つていてそれで一回でも妖怪か何かを見ていて幻想郷

と外について知つていればほとんどの人は驚くだろ。ただ、それが何の妖怪なのか分かるのは別である。

さよも見れているのだろうから最初からお冷が三つ出て来たのだる。そのことに気付いた七花に対し文は思い出したかのよう、「それと、此処で働いている人全員が何うかのことに向こうに行つたそうです」

「先に言えよ。店長の時と一緒に言えば良かつただろ。が」
そうツッコむのと同時に文を蹴る。

七花はゆっくり饅頭を食べながら文に対し、

「それで、何を聞きたいのぞ」

その質問を受けた文はお茶を飲んだ後少し間をおいてから、「この作品の今後についてです」

「飛ばし過ぎだ」

さつきと同じように七花は文を蹴つておく。

「読まないでください」

「お前の手帳を?」

机に突つ伏しながら文はこの作品なのかそうじやないのか判り難い発言をした。それがこの作品に対してもじやないことを作者は少しばかり思つ。

七花は昔に隙を見てみようとしたら本氣で幻想風靡をして来たのでからかう程度に言つていた。

そう七花が言つた後、文は何かに絶望した様な幻滅したような顔を浮かべた。

その顔を見たさよは怯えて七花は受け流しながら女子としてその顔はどうなんだと思いながらお茶を飲んでいる。文は怯えているさよを見て「冗談ですよ、冗談と言つて場を落ち着けさせる。一割くらい」と小声で言つていたことはさよは知らないのだが。

まあ、どこかズレている感覚は本人には分からぬよう周りから見てドン引きしていたり懐かしがっている人たちがいたりと常識と平常を持つてないとツッコめない状態だった。むしろ、そんな状

況だから誰も入りたがらないのだが……

「……それで？ 本当は？」

「」のままだと話が進まないと想い七花は今までの空気をスルーするかのように切り出す。

文もそれに乗つかるように話を進めていく。

「えっとですね。向こうの人たちから『あの人は今……』って計画を（天狗たち）全員でやっているんですよ。それであの人はって言う位だから今向こうにいない人だろうという事になり、何処に居るかは分かつていてそれでいてネタになりそうなあなたの所に来ました」

「そりかそりか。よし、やつぱり帰れパパラッチ」

七花はかなりあつさりした声でそう言つた。

「む。それは契約違反になりますよ。奢ったのですから」

「……………」
「え？ 君に奢れる金があるの？」

「そんなにこの人の信用がないんですか！？」

多分、ではなくおそらくそう聞かれたら全力でYESーと言い切る自信はあると七花は自負出来るだろう。

そんな事を考へている七花を傍目に文は顔を下に向けながら高笑いに繋がりそうな声を出している。

さよと七花は何考へているんだらうと少しばかり諦めながら文を見ていた。

「こっちのお金はしつかり持つてきますよーー！」

そう宣言しながら彼女はポケットから5000円札と1000円札を2・3枚取り出した。文の取り出したお札をまじまじと観察するよう七花は見ていた。彼の目から見ればそれがどういうモノなのかはよく分かる。

転生時に貰つた能力としてだけではなく、今までを過ごしている間にモノを理解するように、それを受け止め観察し近い形で再現するように。

「僕の部屋から持つてきてないよね？」

本物と理解したから出る言葉だつた。七花は文が何時から麻帆良に来たか知らないため換金したそういう考え方も浮かんだが天狗が人の家に勝手に来たり、新聞を窓から入れたりすることを知っているので何となくそういう考えになつた。

だが、文はそう言う風に考えつかなかつた。

これに関しては価値観の相違だとしか言えないし、幽霊は空氣に押されたのかパニックになりかけている。

「あなたは一体私をどういう風に見ているんですか？私がそんな事する事でも？」

「お前…………昔僕の部屋に不法侵入したことを見たか？」

「その事は誠に申し訳ございませんでした」

価値観が違つても善惡の判断にそう違いはなかつた。

七花は溜息をついてから文の取材を暇潰しに受けることにした。

東方から一人出るよ～（後書き）

はたてだと思つた人、拳手
……下ろして。

文句があるなら感想の方に軽めで軽めに書いといて下さい。酷過ぎると作者がダメージで瀕死になりますから。
それとあれ、もとい、記者は念印記者らしいからパバラッチではないから。

まあ、次回この続きになるんだろうな。
尾行班の視点はあるけど老人の方の視点はない。
けど老人の視点で見たい人が居たら拳手。

なのでそれがあわせて感想などがありましたらよろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3771v/>

刀と怪異と学園と。

2011年11月26日17時56分発行